

令和元年6月20日現在

機関番号：32687

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12820

研究課題名(和文)「アジア主義」思想の形成と展開の諸相 岡倉天心の思想と人脈を中心に

研究課題名(英文) Tenshin Okakura and "Pan-Asianism": An interpretation on the ripple effect of the activity of the Japanese outstanding ideologist.

研究代表者

佐々木 一憲 (SASAKI, KAZUNORI)

立正大学・仏教学部・特任講師

研究者番号：80508515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：狭義の「アジア主義」は、帝国主義時代に西欧列強諸国の支配下にあったアジアを、日本が盟主となって解放すべきと説いた主張であり、その主張の正当化に寄与した理論的根拠となる思想と定義される。その思想の先駆的な提唱者と目されるのが岡倉天心であり、彼の「アジアは一つ」というスローガンは、天心自身の意図を離れたところで日本国内のみならず、時代や民族を越えて多くの人々を感化した。本研究では「アジア主義」の形成と展開における天心の影響力について捉えなおし、その感化力と波及効果という側面から、従来よりももう一段広い視野において岡倉天心という人物の存在と活動の意義づけを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「アジア主義」の代表的な唱道者・岡倉天心の活動が各方面に及ぼした影響について、受け手側の視点に焦点をあててその意義を考察した。天心が如何なる主張をしたかではなく、彼の活動に直接・間接に接した人々がそれをどのように受け止めたのかに着目して逆照射したことで、彼の感化力とその活動の波及効果をより明瞭に描きだすことができたと考えられる。

天心の影響を最も顕著に受けたのはインドと米国の知識人層であり、彼らにアジアという「想像の共同体」を認識せしめた天心の構想力、およびその背景にあるインド文化/仏教について指摘しえたことも、同分野を専門領域とする現報告者ならではの貢献であろう。

研究成果の概要(英文)： So-called "Pan-Asianism" would be defined, in a narrower sense, as the 19c advocacy of liberating Asian Nation-states from supremacy of the Western imperialism under the leadership of the Japanese Empire, also as the theoretical representation supporting it. The well-known slogan "ASIA IS ONE" that was given out by Tenshin Okakura, a representative pioneering advocate of the ideology, left alone from the very advocate to have un-willingly justified the invasion of the Japanese Empire into Asian Nation-states.

In this research project, the present author intended to put re-consideration on the true effect of Tenshin's activity towards the world and give it a new evaluation from the broader context.

研究分野：インド哲学・仏教学

キーワード：岡倉天心 アジア主義 ヴィヴェーカーナンダ タゴール フェノロサ Oneness ベンガル・ルネッサンス ポストン美術館

## 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、改めて20世紀の国際関係史を回顧・概観してみるならば、我々はそこにアジアの凋落と復権というダイナミックな動きを見て取る事が出来るだろう。凋落についての主導者が英国を筆頭とする欧米列強諸国であることは言うまでもない。一方で復権に関して見るならば、その内的な動機の如何はひとまず措くとして、史実として欧米列強諸国に対する最初の対抗勢力となったのは日本であった。この日本の動きは、最終的には必ずしも当初想定していた事態をもたらすことにはならなかったが、第二次世界大戦後の東西冷戦の世界において次第に頭角を現すことになった第三世界の動きに引き継がれたと言って良い。この「第三世界」という呼称の提唱者として知られるのがインドのネルーであった。ネルーはこの呼称を通じて、アジア・アフリカ諸国を東西両勢力から切り離された独自の勢力として打ち立て、世界に認めさせることに成功したのである。

ジャワハルラル・ネルーはインドの英国からの独立運動において活躍した運動の主要な闘士の一人である。「聖者」マハートマ・ガンジーの参画により全国規模の運動へと拡大した独立闘争であるが、それ以前の闘争の中心は旧都カルカッタを擁するインド東部のベンガル地方であった。ベンガルは英国総督府の置かれたカルカッタを中心に西欧の先進的文化を吸収し、また欧州におけるオリエンタル・ルネッサンスと呼ばれる文化動向を逆輸入して、早くからベンガル・ルネッサンスと称されるインド国粋文化主義の萌芽を見ていた土地であった。カルカッタに基盤を置く有力な土豪の中でもこの時期とくに力をつけていたのがタゴール家であった。彼のサロンには多くの名士・文士が集まり、タゴール家はその影響力を高めていた。

そのころ、ベンガル・ヒンドゥー教徒の聖者ラーマ・クリシュナの弟子のスワミー・ヴィヴェーカーナンダ師が米国シカゴの万国博覧会に合わせて開催された世界宗教者会議において行った演説が世界的な評判を博した。この演説を契機に、とくに米国におけるインドの精神性に対する興味関心が大いに湧き上がることになった。その評判は同会議に出席していた日本の代表団を通じて、また、米国社交界と通じていた「お雇い外国人」やその縁者たちを通じて日本にももたらされた。

岡倉天心は、東京帝国大学在学中からの恩師である「お雇い外国人」のE・フェノロサと、そのスポンサー的な立場にあったW・S・ビッグロウとの交遊を通じて、仏教美術への興味を育み、その興味を展開する形で、アジアの精神文化が、仏教の伝来経路に沿って、最終的に日本に終帰するという彼一流の文明史観・美術史観を打ち立てるに至った。すなわち、後世にアジア主義のスローガンとして利用されることになった「アジアは一つ」という文句によって象徴される、天心一流の日本をアジア文化の精華とする文明史観である。

さて、天心は日本・京都での第二回世界宗教者会議開催を画策した仏教僧・織田得能と諮って、来るべき第二回会議のゲストとしてヴィヴェーカーナンダ師を招致すべくインド・カルカッタに渡ることになる。招致そのものはヴィヴェーカーナンダ師の体調不良などの事情もあって不調に終わるが、このとき同師を通じて親交を得たタゴール一族との交流、また同師の教団/使節関係者たちとの交遊が、その後の世界史における「アジアの復権」の歩みに大きな影響を与えていくことになった。すなわち、岡倉天心という一人の日本人の活動を媒介として、日本とインド、米国を主とする西側諸国それぞれのアジア観が交錯し、その交錯の中においてアジア復権の機運が次第に醸成されて行くこととなったのである。

本研究の実施者(研究代表者)/現報告者は、今回の研究課題を構想するのに先立って、「お雇い外国人」ラファディオ・ハーン(小泉八雲)と西欧近代における「仏教学」の形成の関係について論じた科学研究費補助金助成研究(若手研究(B))『ラファディオ・ハーンのお雇い外国人と近代仏教学(課題番号:22720027)』を遂行している。その意味で本研究課題は、ハーンについての研究で得られた知見を足掛かりとして、その延長線上に、同研究遂行当時はおぼろげにしか見えておらず、そのためそこでは明らかにしきれなかった時代背景などについて、一歩踏み込んで明らかにしようとしたものでもある。同研究により得られた近代仏教学の形成をめぐる東西思想界の動向に関する視界と知識は、本研究遂行において新しい視野を開拓していくにあたって、大いに有効なものであった。

## 2. 研究の目的

先学諸氏また現報告者自身の先行研究によって、おおよそ上記のような見立てが得られた。これを背景として、本研究は20世紀人類史の巨大な潮流となった「アジアの復権」という事態の源流を岡倉天心の活動とその人脈に求め、その解明を志した。

原報告者自身が研究を進める上で最も参考にさせていただくことになった稲賀繁美博士の諸論考をはじめ、このテーマについてはすでに優れた研究の蓄積があるが、現報告者はインド哲学・仏教学を専攻する研究者ならではの切り口をもって臨むことにより、そこに新たな知見を加える余地があると考えた。その新知見の中核となると期待されたのは、インドならびに米国の思想界/世俗社会における天心の活動の波及効果について、であった。従来の研究よりも長いスパンで彼の活動の影響が及んだ範囲を追求することによって、天心の活動の真価を今一度問い直そうと試みたのである。

「アジア主義」というとき、そこにはアジア進出に突き進んだ日本軍国主義のスローガンという印象が避けがたく付きまとう。そしてその主要なイデオログの一人とされてきた天心にもまたそのイメージはかぶせられてきた。一方で、天心の文明史家、美術史家としての側面は

戦後なかば意図的に矮小化され、その影響力についても否定的な言辞をもって語られることが多かったように思われる。

21世紀に入り、適度な距離感が得られるようになったことで、20世紀初頭の日本の国際化の歴史に大きな足跡を残した天心の国際人としての側面をより中立的な立場から評価することが可能となった。しかしながら、日本国内に蓄積された史料は、天心その人の込み入った人間関係のしがらみや、戦後の東洋美術史学界内の政治的な動きを受けて、天心について否定的な評価でもって語る事がなかば常態化していた影響から、天心に対してやや不当な評価が強い傾向にあるように感じられ、国内史料の文献研究のみからでは、今日の研究者がいわば「真の岡倉天心像」について公平中立な立場からの評価を導き出すことは困難に思われた。

そこで現報告者は、むしろ実際に影響を受けた側の史料にあたり、天心の思想と行動が彼らにあたえた影響や印象の「質」を掘り起こそうと考えた。

後に言及するように、「アジア主義」という天心の文明史的構想は彼の没後すぐに、彼の後継者たちによって「意図的に」乗り越えられ過去のものとされてしまう。その一方で、美術史の分野においてうち捨てられたその構想は、後に社会思想史の分野へと引き渡され、その引き渡された先で軍国主義的な拡張政策を正当化したものとして、天心その人ともども糾弾の的とされることになった。いうなれば、そのイメージが今日まで天心のイデオログとしての評価を決定づけてしまっているのである。

しかし、天心という人物が後世になにか大きな影響をもたらしたとするならば 実際、20世紀後半の「アジアの復権」に繋がる種をまいたのは彼だと現報告者は見ているのだが、それは「思想」によるものではなくて、その社会的な「人間性」であり国際的な「活動」によるもの、すなわち、天心という人間そのものの存在感によるものであったと現報告者は考える。

この見立ての妥当性を説得力のある議論とともに示すこと。それこそが本研究の目的とするところである。

### 3. 研究の方法

あまり意識されないことではあるが、対照実験を通じてある自然現象における主要な因果関係の抽出を意図する自然科学とは異なり、対照実験が原理的に成立しえない人文社会系の研究、とりわけ歴史研究においては、実際に起こった事件とその主導者と目される人物/団体の意図との間の因果関係を直接的に結びつけて論じることは不可能である。自然科学で明らかにされる因果関係は必要条件・十分条件を完備したものであるから、原因→結果の関係は原因の側からでも結果の側からでも等価なものとして語ることができるが、人文社会系の研究においては、結果から原因を類推することはできても、原因となりうる事柄をもとに起こりうる結果を特定することはできないのである。

とりわけ歴史はまさに仏教的な意味での「縁起」的な現象なのであって、ある時代において目立った活躍をみせた人物がいて、さながらその人物の思い通りに時代が動いていたように見えることが仮にあったとしても、実際に起こったことはその人物が胸中に思い描いていたこととは全く別のことであったり、あるいは逆に、意図していた方面とは全く別のところでその人物の思いが時勢の動きに影響力を持つに至った、ということが大いにありうる。そうしたあり方がむしろ歴史の本質なのである。

その意味でいえば、ある人物の思想・信条を解明することは、その人物の周囲に起こったことの直接的な説明にはなりえないのであって、「思想→事件」という方向では歴史は語れず、したがってもしある思想とある出来事/状況との関係を語るのであれば、厳密には「ある思想が時代状況を作った」ではなく、「ある時代状況の背景にはこの思想があった」というようにレトロスペクティブにしか語りえないことになるはずである。現報告者が本研究課題遂行にあたってあえて受け手側の受け止め方や影響の波及効果という点に着目して研究を進めようと考えたのは、以上のような歴史についての見解に基いている。

具体的な研究方法については、この後述べる実地調査のほかには、文献史料の蒐集と読解が中心となった。その際、利用する史料の選定においては、当初からの方針に沿って、現地史料を優先的に取り入れるよう心掛けた。

受け手側の受け止め方や影響の波及効果をさぐるためには現地に赴いての実地調査が不可欠である。また、可能な限り、現地研究者との共同研究などを企画し、現地の生の受け止めを集めるよう心掛けようと考えた。インド・西ベンガル州シャンティニケータンに所在するR・タゴールが開いた大学ヴィシュヴァパーラティの日本学院の助教授で、タゴールと天心の交友関係について研究するA・アシム博士との共同研究を企画したことは、その方針の具体化であった。(同博士からは研究論文を一編この研究課題に対して寄稿してもらう予定であったが、急に持ち上がった出版計画の方に当該の原稿を回す必要が生じ、寄稿の件は残念ながら立ち消えとなった)。

ボストンにおいては適当な共同研究の相手を見つけることが出来なかったが、現地のラマクリシュナ・ミッションとは日本の代表部を通じて連絡を取り合い、ボストンにおける同ミッションの活動の歴史などについて聞き取り調査を行う約束を取り付けていた。(ただしこちらも、研究期間内に二年に渡って渡航予定期間に現地が大寒波に見舞われ渡航が中止となり、渡航がなかった最終年度においては先方との都合が合わず、結局実地の聞き取り調査は実現しなかった)。

#### 4. 研究成果

稲賀繁美博士がその論考(「理念としてのアジア 岡倉天心と東洋美術史の構想、そしてその顛末(承前)」、『國文學』第45巻10号,2000年)の中で、フランスの美術史家フォションの言葉を引きながら指摘しているように、アジア主義者としての岡倉天心というイメージは、彼の「おそらくは架空のものだが、構想としては天才的な」発想であるところの「アジアは一つ」という理念に負っている。天心はその直観的洞察の架空性により美術史家としては失墜を余儀なくされ、その構想の啓示的な力により良くも悪くも軍国主義的拡張政策を正当化したイデオログとしての評価を得るにいたったのである。

岡倉天心のアジア主義を論じる上での主要な論点はこの指摘に尽きているように思われる。従って従来の方角性の延長線上において天心を論じるなら、結局は「アジアは一つ」を無意味な空想と断じて天心の存在意義そのものを否定しるか、空想ではあるが天才的という点を掬い取って、仏教の伝播範囲を補強材料とするなどしながら、その意義をむしろ強調するかのいずれかの方向を取るよりないように思われるのである。

本研究はそのどちらの立場もとらない。そうではなくて、天心その人が、その人間力によって訪れた先々で現地の人々をどのように感化し、またその影響がどのような形で波及して現実社会の潮流を作っていたのか、という点に着目してその解明を試みたのである。

(1)それを論ずるに先立って、天心自身がどのように自身のアジア観を形作っていたのかを辿ることが必要とされた。この点でやはり決定的に重要だったのは、フェノロサの助手として遂行した奈良・京都の仏教美術品調査(古社寺宝物調査)であった。寺院建築や仏像などは元來信仰の「器」であり「対象物」であって、それまで美術作品として見られたことはなかったのであるが、フェノロサの敢行したこの調査を皮切りに、寺院建築や仏像などが、造形芸術作品として扱われることになったのである。日本美術の誕生という文字通り画期的な出来事なのであり、これを契機に日本美術をその上位概念である人類美術史のなかに位置づけるといふ発想が天心のなかにうまれたものと考えられる。すなわち、アジアの文化が終期する場所としての日本という発想が生まれる土壌がここに用意されることとなったのである。また、この出来事と前後して、天心はフェノロサ、ビゲロウとともに園城寺法明院の桜井敬徳阿闍梨について受戒し在俗信徒となっている。このとき宗教信仰としての仏教と改めて向き合ったことは、当時の仏教復興運動における釈尊回帰の潮流と合わせて、天心にインド訪問の動機を与えることとなったという意味で重要である。

(2)さて、次に考察の対象としたのは、天心のインド人脈であった。天心は校長をしていた日本美術院において自身の講義を聴講していた米国出身の婦人ジョセフィン・マクラウドを通じて、近年米国において評判を呼んでいるインド人宗教家ヴィヴェーカーナンダ師の存在を知る。当初書面により同師を日本に招待したが、体調不良を理由に同師が渡航を躊躇しているとみるや、天心の方から、仏跡巡拝も兼ねたインド訪問を企図することになる。果たして両者はカルカッタにおいて相まみえることになり、天心は同師より聴聞したアドヴァイタ・ヴェーダーンタの教理「不二一元論」を通じて「一にして終歸」なる Oneness というアイデアを得ることになる。

インド行ではヴィヴェーカーナンダ師との出会いとともに、彼の下に出仕していた英国出身の尼僧シスター・ニヴェーディタ、さらには詩聖タゴールの一族との邂逅があり、インドの独立運動に深く関わっていたこの両者との出会いが、それに連なる人脈とともに、天心の影響力がその後地域や時代を超えて拡張していくうえで決定的な重要性を持つことになった。

天心のインド人脈の中には才能ある芸術家も多く、天心経由で日本画の画法を学んだ画家たちは後にベンガル・スクールと呼ばれるインド近代絵画の一流派を形成した。他方、横山大観や菱田春草など、天心と行動を共にした日本近代絵画の画家たちもインド細密画の画法を取り入れた作品を制作し、日本の絵画界において、西洋画派とは一線を画する一流派を築くに至った。

(3)続いて最後の考察対象としたのが天心のボストン人脈である。フェノロサとともに古社寺宝物調査をした折以來親交のあったボストンの富豪ビゲロウの紹介を得て、天心はボストン美術館の中国・日本美術部門の長に就任する。ボストンは北米マサチューセッツ州の古都で当時の米国社交界・文化の中心地であった。部門長としての天心の展示方針は、日本の仏教美術にみられる環境展示や、中国美術の蒐集方針に見られるように、作品の文化的価値を最重要視する点に特徴がある。ボストン美術館において今日まで継承されているこの方針は、審美眼に加えて文化的価値を見抜く見識をも必要とする非常に高度な専門性を要求するものであるが、その方針を取りえたということから、天心がこの時点において「アジアは一つ」というスローガンに象徴される彼一流の東洋美術・東洋文明史観を確固たるものとしていたことを伺い知ることができる。

上記の方針を打ち出し、見事に実施したことにより、天心はボストンの文化人サロンにおいて一躍一目を置かれる存在となった。この点については、とりわけ社交界の中心人物の一人ガードナー婦人から寄せられた信頼の大きさが注目に値する。彼女に対する天心の影響は、夫人自身が設立した美術館の展示品蒐集方針、展示方針にも顕著にみとることが出来る。

また、この点についてはある意味逆説的ではあるのだが、同じくボストン美術館のインド美術部門の長として展示を監修したクーマラスワミの方針との比較が興味深い。クーマラスワ

ーミは天心との直接の接触はなかったとみられ、クーマラスワーム自身も自ら天心の影響について言及することはないが、インド美術として、ギリシア風の様式の影響がみられるガンダーラ美術の価値ばかりがむやみに強調された当時の風潮に抗って、インド文化圏独自の美術作品の価値とその展開史の重要性を訴え続けた彼の立場は、「芸術・美術作品の真の価値は、それが作り出された環境・文脈の中に置くことでしか正しく評価されない」と考えた天心の立場と一脈通じるところがある。

いずれにしても、芸術作品を単に審美の対象とするのみならず、文化的価値の文脈に照らして評価するという立場は、今日の「文化財」という考え方に繋がるものであり、そのようなアイデアの源泉の一つに天心が位置を占めているとしたならば、人類文化史におけるその功績の大きさは計り知れないものがある。

以上、本研究課題では、岡倉天心とアジア主義の関係について、時代順に(1)～(3)の三つの側面を中心に、その活動の影響を、後世への波及効果という観点から捉えなおすことを通じて考察した。その結果、天心のアジア主義は狭隘な自国中心主義に発するものではなく、自ら共感を覚えていた仏教の伝播範囲と経路に準えて、日本をあらゆる価値ある文化事象が終帰する場所と見なすアイデアを発想の種として展開した思想であること、またその思想がヴィヴェーカーナンダ師から学んだヴェーダーンタ的一元論をモデルとして組織化されたことが明らかとなった。

また、彼はその思想を説くことで自らの影響力を広げていったわけではなく、内心に蓄えたその思想に基づき発揮された言動を通じて、交遊を持った人たちを自然に感化していったのである。彼の行動がそのような感化力をもったのは、親しく接した相手をハッとさせ、新たな行動に駆り立てるような啓示的な力を彼の言葉や振る舞いが持っていたからに他ならない。厳密な意味では現実的なものではなかったとしても、人に未知の世界を垣間見せ行動の動機を与えるような発想(ヴィジョン)。そのような発想を天才的なものというならば、天心に備わっていたのはまさにその天才的な発想(ヴィジョン)であったのだということができるだろう。

翻って、天心における「アジア主義」とは、自らに宿る審美眼がアジアに生きる人々に共有されてきた精神性に深く根差すものであるとの気づきであり、またその気づきを介して自覚されたところの、東洋が理想としてきたものと自己の感性との間の一体感ではなかったか。それはあるいは「錯覚」であったかもしれないが、天心自身にとってはこの上なくリアルなものであり、それ故に真実であったのだろう。その確信に基づく彼の自信に満ちたヴィジョンと確固たる言動が、周囲を感化し、時代や民族を超えて後世に継承され、やがて現実世界を動かした。

その意味で、天心の「アジア主義」は日帝拡張主義の理念的支柱といったものに矮小化してしまうべきものではなく、20世紀後半の「アジアの復権」の出発点として評価すべきものであると考えるのである。

## 5. 主な発表論文等

〔その他〕

公開講座「タゴールと岡倉天心 絵画を巡る日本とインドの絆」(ナマステ・インド! 2018、セミナーハウスにおける一般来場者向け講演)

## 6. 研究組織

本項目については特記すべき事項なし。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。